

えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から

182

「カッチ色」と聞いて、すぐその色が思い浮かぶ方は漁業関係者かもしれない。

「カッチ」はマンゲローブから抽出した植物性染料で、漁網を染めるのに用いた。漁網に麻や木綿を使用した。漁網に染められていた頃、網は柿渋や染料で染められていた。平成の終わりまでは、伊方町三崎や大洲市長浜近辺のフグを置き、船越に支店を出し、縄漁で綿糸の漁網を使用しており、ドイツ製のカッチ

そのカッチを金づちでたたいて割り、小麦粉袋に入れたおとしてキロ単位で量り売りをしていた。

カッチの配合で色の濃淡が変わり、漁師だけでなく、農家でもネズミよけなどの目的で布を染めていたようである。また漁網の染色にはコールドールも用いられたが、カッチよりも安価で染められることから、大きな網、巻き網などに使用された。コールドールで染めた後は網が「モヤモヤしてモエル」（熱を発する）ため、網に塩をまいて熱を取る作業を行っていたとのことである。

この看板を所蔵していた漁網漁具店は、昭和30年代

漁網の染料「カッチ」

植物由来 今も残る色名



を取り扱っていた。

当館の聞き取り調査によると、船越の店舗は狭かったため、店中でカッチを用いて染めることはなく、カッチを購入した漁師が桶（おけ）やドラム缶に入れて網を染めていたとのこと。ドラム缶（麻袋）に入ったカッチの塊が店に届くと、

に独立し、その後八幡浜市へ移転した。八幡浜市での営業では、カッチをはじめとした漁具を、佐田岬半島の串や与修（よほこり）、名取まで配達していた。佐田岬は道が狭いため、顧客の近くまで車で行き、いったん車を降りて歩いて家を訪ね、ショイコ（背負いし）を借りて車まで戻り、商品を積んで届けたという。最初のカッチ色に話を戻すと、「茶色」や「濃赤褐色」に近いだろうか。カッチを使用して網を染めることとはない現在でも、漁網の色名として「カッチ色」が残っている事実は、とても興味深い。

（専門学芸員・松井寿）

◇

④網の染料カッチ④カッチ看板(縦53.0センチ、横72.0センチ、厚み5.2センチ)＝県歴史文化博物館蔵



「カッチ」と「カッチ看板」は、2月15日開幕の特展「宇和海のくらしと景観」で展示する。地理学者村上節太郎氏が1949（昭和24）年に撮影した漁網を染めている写真も紹介する。

（随時掲載します）